

資 料

A 大学学生の地域看護学実習における 地域保健施設での学び —実習レポート「地域看護の特性」の分析から—

Nursing Lessons Learned by Nursing Students in Public Health Facilities
— Analysis of Nursing Reports —

神山幸枝¹⁾ 会沢紀子¹⁾ 岡本菜穂子¹⁾
石川由美子¹⁾ 落合道子²⁾
YUKIE KAMIYAMA¹⁾ NORIKO AIZAWA¹⁾ NAHOKO OKAMOTO¹⁾
YUMIKO ISHIKAWA¹⁾ MICHIKO OCHIAI²⁾

1) 獨協医科大学看護学部

2) 元獨協医科大学看護学部

1) Dokkyo Medical University School of Nursing

2) Dokkyo Medical University School of Nursing (Formerly)

要 旨

【目的】 地域看護学実習における学生の最終レポートを分析することにより、学生が捉えた地域看護の特性を明らかにする。

【方法】 A 大学看護学部看護学科 4 年次学生の同意が得られた 58 名の地域看護学実習終了後に提出されたレポート内容を質的データとして分析をした。実習を通しての気づきを文脈の意味を壊さないように抽出しコードとし、意味内容の類似性を基にカテゴリー化した。

【結果】 237 のコードから、23 のサブカテゴリーに分けられ、最終的に [生活の場での住民との協働] [潜在的な健康課題を予見した関与] [個別課題から地域課題へと発展] [専門的・組織横断的な連携及び協働] [地域特性に応じた PDCA サイクルの展開] の 5 つのカテゴリーが抽出された。

【考察】 学生は、地域看護の特性について、保健師が [生活の場での住民との協働] や [専門的・組織横断的な連携及び協働] の実践をとおして [潜在的な健康課題を予見した関与] をしていることや、保健活動が [個別課題から地域課題へと発展] であり、[地域特性に応じた PDCA サイクルの展開] を中心とした活動であると捉えていた。地域看護実習の効果を高めるために、事前学習からつなげて考える導きをすることや、実習後のカンファレンス等で深めることなど、実習方法を検討する必要がある。

キーワード：地域看護学実習，地域看護の特性，教育

I. 緒言

全国保健師教育機関協議会（平成 21 年 3 月報告書）¹⁾ は、保健師の質の担保を図る観点か

ら、保健師教育体制の見直しや質の高い保健師の育成を図るため、統合カリキュラムの撤廃と保健師への志向性と適正をもつ学生を対象とし

た新たな学生選抜体制の推進を提言した。これまでも、看護系大学の増加に伴い保健師学生の急増をもたらす影響が取りざたされており²⁾、看護系大学では、保健師国家試験受験資格に必要な科目が卒業要件となっていたため、すでに学生のレディネスが担保されていない現象が生じていた。その後、文部科学省における「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」と関連して、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正がされた（平成23年1月）。これに伴い、厚生労働省は保健師の実践能力の強化に向けて教育内容の充実を図ることを掲げており、①名称を「地域看護学」から「公衆衛生看護学」へ、「地域看護学実習」から「公衆衛生看護学実習」へと変更がされ、②公衆衛生看護に関する授業・実習単位の増加等、保健師の役割と専門性を強調する内容となった。これまで23単位であった必修単位は28単位となり、実習単位は、3単位から5単位へと増加した。特に、実習において保健所・市町村は必須とし、学校、事業所、医療福祉施設等の多様な場で行うことが付記された。

これらの取り組みにより、社会のニーズや各大学の教育理念・目標に基づき、保健師教育の選択性導入が可能となった³⁾。

先行研究では、地域看護学実習を行った看護学生の保健師活動や役割の理解に対して、「個人」の健康課題への関わりや「実際の活動内容」については理解していることや⁴⁾対象の生活の場における支援の難しさの理解がされている⁵⁾などのプラスの面が明らかになっている。一方で、対象を「集団」として捉えての理解が乏しいこと⁶⁾、「統計と日常生活関連情報から地域診断する視点」「費用対効果」に関する学びがないこと⁷⁾、ヘルスケアシステムを含めて地域看護管理の視点が弱いことや、健康増進や予防といった疾患を持たない健康な人々への看護活動をイメージして実習に臨むことが困難⁸⁾であることなど学生の苦慮している様子が伺える。また、選択性の導入に先駆け統合カリキュラムにおける課題を検討した大学の看護学生は、家庭訪問や保健事業に参加しても個人の健康課題

を地域全体の健康課題に結びつけることが難しい現状であったことが示されている⁹⁾。保健師は高度な実践能力を求められているのに対し、現状の保健師教育においては卒業時に必要な最低限の到達レベルに達しないことも多く、実際に求められるものと新卒保健師の能力の乖離が大きくなってきている¹⁰⁾。特に看護学士課程の学生は保健師の専門性や独自性を捉えることが難しいことは指摘されているが¹¹⁾、学生は実習を通して地域看護をどのように理解しているのか、どのような実習体験が地域看護の特性を捉えることにつながるかについては探求されていない。

保健師教育課程における「卒業時まで学生が必ず修得する最低限の技術」が提示され始めているが¹²⁾、レディネスが担保されていない学生も含む学生の保健師実践能力向上に向けての教育方法や教育内容は十分に究明されておらず、教育体制を検討することは急務である。

A大学では開設以来、保健師・看護師教育課程が必修になっている統合カリキュラムにより看護学教育を展開してきたが、平成25年度よりカリキュラムを改正し、新カリキュラムを構築していくことになった。このような中、選択性を導入することなく全看護学生への保健師教育を行っているが、学生たちの地域看護への理解を引き出し、保健師実践力を培う上でも、学生が捉える地域看護の特性を把握しておくことは今後の地域看護学教育の発展において必要不可欠である。

そこで、A大学の地域看護実習において学生がどのように地域看護の特性を捉えたかを明らかにし、地域看護学教育の今後の課題を報告する。

II. 研究目的

地域看護学実習における学生の最終レポートを分析することにより、学生が捉えた地域看護の特性を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法：

1. 研究対象

A 大学看護学部看護学科4年生105名のうち、当研究協力に同意を得られた58名の学生の実習終了後の最終レポートを分析対象とした。

2. データ分析

学生58名の「地域看護学実習を通して気づいた地域看護の特性」のレポートから「地域看護の対象」「地域看護が行われる場」「地域看護の方法・技術」について、学生の学びに関する文脈を、文脈の意味を壊さないようにコードとして抽出した。初期コードの抽出にあたっては学生が記述している言葉をそのまま使うように留意した。コードの意味内容から類似性を確認し、サブカテゴリー名をつけた。次に、サブカテゴリーの内容の類似性を確認、検討してカテゴリー化し名称をつけた。分析にあたっては地域看護学領域の研究者4名と実習指導教員1名の5名で討議、検討を繰り返して、妥当性を高めるように努めた。

3. 調査期間

平成26年10月—12月

Ⅳ. 倫理的配慮

本研究は、獨協医科大学生命倫理審査委員会の承認を得て実施した(受付番号 看護26011)。対象の学生には、研究方法、研究協力の有無や記録内容は成績に影響を与えないこと、時間的拘束の負担はないこと、研究の協力または辞退により不利益が生じることは一切ないことを、口頭と文書で説明した。署名をした同意書の提出をもって、研究協力の同意とした。研究協力に同意した学生の最終レポートは、番号管理にて個人が特定できないようにし、鍵のかかる部屋で保管をした。

Ⅴ. 地域看護学実習の概要

A 大学では、保健所・市町村における保健活動を地域看護学実習において4年次前期に3単位270時間で実施している。平成26年の実習日程は、5月12日より7月11日の期間3クールに分けて、学内実習を含む保健所が1週間、

市町村2週間の計3週間である。

事前学習課題として、①実習市町村の地区アセスメントを行い、健康課題を抽出した。②実習予定事業に基づき法的根拠および概要を予習した。実習初日には計測技術や健診時の問診内容の確認を行った。

(1) 実習目的

保健医療福祉活動の実際を理解するとともに、地域住民のあらゆる健康課題に対応する地域看護の機能および方法・技術を学ぶ。

(2) 実習目標

- ①保健所と市町保健部門の機能と役割を理解する。
- ②地域における保健医療福祉活動の特性を理解する。
- ③個人・家族、集団の健康上の問題・課題を社会的条件と関連させて考える。
- ④個人・家族、集団のセルフケア能力を高めるための地域看護活動の方法・技術を学ぶ。
- ⑤保健師の行う連携と調整の実際を学ぶ。
- ⑥地域看護活動における計画・実施・評価の一連のプロセスを理解する。

(3) 実習方法

- ①実習機関は県内9か所の保健所と19か所の市町健康増進部門である。学生配置は、保健所と管轄市町の組み合わせが可能な学生が全体の6割程度であり、それ以外の学生は、保健所が県北、市町が県南等の組み合わせで実習を行った。
- ②学生の学びを共有するため、実習最終日に、他の保健所・市町村で実習を行ったグループ間でのカンファレンスを実施した。
- ③実習を通して学んだ地域看護の特性について考察し、最終レポートにまとめた。

(4) 実習体験

- ①保健師の家庭訪問に、1事例以上(新生児・乳児、高齢者、精神、難病など)同行する。26年度実習生は、全員が同行実施した。
- ②保健師が行う集団健康教育に参加し、可能な範囲で10-15分の実際の健康教育を実施する。26年度実習生は、市町村グループ毎に全員が実施した。

③健康診断時の問診の見学あるいは一部実施、一次・二次予防事業への参加、特定保健指導、相談事業を見学する。

④地区組織活動事業の見学一部参加する。

⑤事例検討へ参加する。

(5) 実習指導体制

実習指導は大学教員と各市町の指導保健師が行った。市町ごとに1名の教員が担当し、実習指導とカンファレンスを指導保健師と協働して行った。健康教育は市町毎に実施し、事前のリハーサルを含め、学生同士意見交換をし、学びを深めた。

実習終了後は、実習のねらいに沿って自己評価をするとともに市町ごとの学びについてグループ報告会を行い、学びの共有化を図った。実習レポートは実習を通して気づいた地域看護の特性について実習報告会終了後に作成した。

VI. 結果

学生の「実習を通じて気づいた地域看護の特性」のレポートを分析した結果、237のコードが抽出された。抽出されたコードは、23のサブカテゴリーに分けられ、最終的に「生活の場での住民との協働」[潜在的な健康課題を予見した関与] [個別課題から地域課題へと発展] [専門的・組織横断的な連携及び協働] [地域特性に応じたPDCAサイクルの展開] の5つのカテゴリーに分類した。カテゴリーとサブカテゴリーおよび主なコードは表1のとおりである。

以下、カテゴリーは[]、サブカテゴリーは『』、初期コードは「」, 学生の記述はイタリック体で表記した。なお、記載部分の文脈を明らかにするために説明補足した内容を()で示す。

1. 生活の場での住民との協働

『住民が主役となって地域の課題に取り組める支え役』『生活ニーズに寄り添ったバックアップ』『住民の声を受け止め共感する生活支援者』『地域看護を展開するための幅広いアセスメント』『健康意識や行動変容へつながる働きかけ』『生活者が身近で相談できる相手』『地域保健活動に不可欠な住民との信頼関係づくり』

の7つのサブカテゴリーから「生活の場での住民との協働」を抽出した。

1) 住民が主役となって地域の課題に取り組める支え役

学生は地域看護の特性として、地域看護活動は住民が主体となるよう働きかけることが役割のひとつであると捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で)健康づくりを自分のために行う意識付け、きっかけづくり、力を引き出す関わりを行っている。地域移行の動きがある中で(自立支援は)障害者支援のために住民を巻き込み、つながりを作っていくべき。

2) 生活ニーズに寄り添ったバックアップ

対象者の生活の中に入り支援していくことを地域看護の特性として学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で)その人らしく暮らせるために必要な支援を行うことが目的であるため、地域で生活している生活者の視点に立つことが重要である。(健康教育で)実際に触ることのできる物や、味見ができる食品、体操など、できる限り生活場面に近い状態で経験できるように取り入れることが効果的である。

3) 住民の声を受け止め共感する生活支援者

対象者の不安や辛さを受け止め気持ちに寄り添いながら関わることを地域看護の特性として学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(乳幼児健診で)信頼関係の構築のために必要なことは、育児をねぎらったり、児の成長、親の頑張りを認めたり、親を全面的に受容し共感することである。(精神保健クリニックで)保健師は助言だけでなく「大変でしたね」などのねぎらいの言葉をかけており、そのような相手の気持ちを考えた声かけも大切である。

4) 地域看護を展開するための幅広いアセスメント

地域で暮らす住民を取り巻く生活環境や地域の現状、社会の情勢などを含めたアセスメントが地域看護活動を展開する基盤となることを学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

表1 カテゴリ・サブカテゴリ・主なコード一覧

カテゴリ (コード数)	サブカテゴリ (コード数)	主なコード
生活の場での 住民との協働 (99)	住民が主役となって地域の 課題に取り組める支え役 (19)	住民の主体的活動のきっかけづくり
		住民を巻き込み繋がりを作る
		人々が相互に支え合い解決できるよう介入
	生活ニーズに寄り添ったバ ックアップ (19)	その人らしく暮らせるために必要な支援
		社会復帰を目指した居場所づくり
		生活場面に近い体験を取り入れた教育
	住民の声を受け止め共感す る生活支援者 (16)	育児を労い認め全面的に受容
		気持ちに寄り添いながら優先順位に気づかせる
		相手の気持ちを考えた声かけ
	地域看護を展開するための 幅広いアセスメント (13)	的確なアセスメントと、その人の家族や地域を踏まえた対応
		対象者と対象者を取り巻く社会、環境、地域から情報収集が必要
		ニーズをつかむには出向くこと
	健康意識や行動変容へつな がる働きかけ (12)	コーチング的関わり
		できることからの教育
		住民と根強く関わる
	生活者が身近で相談できる 相手 (12)	一番身近な医療従事者
安心して相談できる存在		
困り事や相談にいつでも対応するという姿勢を示す		
地域保健活動に不可欠な住 民との信頼関係づくり (8)	生活の場に入るには地道な信頼関係が必要	
	母親の本音を聞き出す関わり	
	言葉遣いや配慮が信頼関係につながる	
潜在的な健康課 題を予見した 関与 (36)	乳幼児および保護者の健康 課題や保育力へのアプロ ーチ (10)	様々な場面から母子の観察
		子どもだけでなく親にも目を向けて母子ともに支援
		前向きに取り組めるよう養育環境を整える
	潜在的ニーズを引き出し対 象者が認識できる関わり (8)	保護者の心理や子のへの接し方を細かく観察
		真実を捉える観察とアセスメント力
		本人の気づかぬサインに気づく
	科学的に正しい知識を活用 した専門的な関わり (7)	正しい知識の伝達による予防活動
		市が主催することの責任
		根拠のある行動
	長期的視野での対応力 (6)	今後を見据えた家族と本人の思いのすり合わせ
		予測して窓口を伝えておく
		予測される問題に対し、限られた人と予算の中で長期的な対策を考える
健康課題への予防的アプロ ーチ (5)	実際の環境から問題を予測	
	住民全体の予防に関わる	
	将来を見当し予防する	

(つづく)

(表1つづき)

カテゴリ (コード数)	サブカテゴリ (コード数)	主なコード
個別課題から 地域課題へと 発展 (31)	地域組織・当事者グループ 活動を育成する継続的な関 わり (10)	対象者ばかりでなく支援者を支える
		住民自主グループ活動を支える
		住民が主体となって活動できるような支え
	個人の健康課題から地域健 康課題へと展開する活動 (9)	個人を見ながら地域全体の問題を見出す
		子育てを地域全体で支えている
		地域全体の予防行動獲得が目標
	個人、地域とつながり続け ながら活動する (5)	ネットワークの一員としての自覚を持った継続的な関わり
		継続した看護
	地域や当事者同士で支え合 えるネットワークづくり (5)	子供を守る環境維持と体制づくりに努める
		住民同士をつなぐ
		お互いに助け合えるよう働きかけ
	住民が地域の健康課題を認 識するような働き掛け (2)	住民理解の啓蒙
一次予防活動の周知		
専門的・組織 横断的な連携 及び協働 (46)	関係者・関係機関と協働し ながら地域を支える (24)	他職種と協働で住民を支える
		他職種で多面的に見てより良い方向の決定
		他職種との連携を通してネットワークを張る
	日々の個別支援から最適な 資源への橋渡し (13)	必要な資源の紹介体制
		セルフケア能力を最大限に発揮できるよう資源を効果的につなぐ
		いち早く気づき、つなぐ
	多職種・他機関間の調整 (9)	多職種との人間関係形成
支援者の負担を共有し支える		
	フォローアップ機関との調整などの仲介的な役割	
地域特性に応 じた PDCA サイクルの展 開 (25)	地域課題の抽出から計画・ 実施・評価プロセスの責任 を担う (15)	地域の課題抽出から事業の展開までつなげる
		地域診断によるニーズ対応
		計画・実施・評価の一連のプロセスで支える
	地域特性に応じた保健活動 の展開 (6)	地域の特徴に合わせた関わり
		地域を多角的に捉え長期的な支援
	費用対効果と公平さを考慮 した事業の実施計画 (4)	財源が関わっている予防活動
		管内のサービスの質保証
	費用対効果を重視	

す。

(様々な事業で) 対象者にだけ目を向けるのではなく、対象者を取り巻く周囲の環境や地域の現状、社会の変化などを理解できる幅広い視野と日頃からの情報収集が必要。住民から相談されるのを待つのではなく、保健師はまず地域に出向いて訪問(家庭訪問)すること、そして一声をかけてみる事が大切。

5) 健康意識や行動変容へつながる働きかけ

地域看護の特性は、疾病治療への援助ではなく、意識変容や行動変容を促すことに重点を置いた援助であると学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

今までの人生の中で培ったものは人それぞれであり、価値観、理解力は人により異なる。だからこそその人の価値観、理解力に寄り添い、'できることから始めよう' という考えが重要。そのため、(特定保健指導は) いかに関与のインパクトのある、実践しやすいものにするかがポイントである。

地域を巡回した時に様子を確認しに行ったりすることで助けを求められない人に気づき、(困難事例訪問は) 住民と根気強く付き合っていくことが必要。

6) 生活者が身近で相談できる相手

地域で暮らす住民にとって保健師が一番身近な医療従事者であることを学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(高齢者訪問は) 困ったときに相談できる、心の拠り所となる窓口のような存在である。(様々な事業で) 保健師は地域で暮らす住民にとっては一番近い医療従事者である。

7) 地域保健活動に不可欠な住民との信頼関係づくり

継続的に地域看護活動を展開するためには相手からの信頼を得るような働きかけが必要であることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(家庭訪問で) 生活の場に足を踏み入れられるまでには、保健師による対象者との地道な信頼関係の構築が必要。(赤ちゃん訪問で) 初対面で母親の本音まで聞くことができるように話

し方などを気遣いながら関わり、母親が話せる雰囲気を作ることが大切である。

2. 潜在的な健康課題を予見した関与

このカテゴリーは、『乳幼児および保護者の健康課題や保育力へのアプローチ』『潜在的ニーズを引き出し対象者が認識できる関わり』『科学的に正しい知識を活用した専門的関わり』『長期的視野での対応力』『健康課題への予防的アプローチ』の5サブカテゴリーから構成された。保健師が健康相談や家庭訪問、健康教育等の活動の展開を、リスクなどを予測または予見したうえで行われていることを捉えている。

1) 乳幼児および保護者の健康課題や保育力へのアプローチ

学生は地域看護の特性として、生活の場での子どもとその家族の両方に対する関わりであることが役割のひとつであると捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(赤ちゃん訪問で) 支援について紹介・説明する際には、その家庭の家庭状況、児の成長・発達状態などを踏まえて必要な支援を考えつつ、母親の声のトーンや表情の変化に注意する必要がある。(育児訪問で) 保健師の役割としても言語指導員との情報共有や今後の継続した支援方法の選定など他職種や他機関との連携が役割としてあるが、子供だけでなく親にも目を向けて物事を考え、母子ともに支援していく関わりがある。

2) 潜在的なニーズを引き出し対象者が認識できる関わり

地域で暮らす住民自身では気付かないニーズを引き出しながら対象者の真のニーズに変えていくような関わりがあることを学生たちは捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

母子家庭訪問では、児の状態や母親の育児手技と獲得状況を確認するだけでなく、母親の言動から本人に気付かぬサインに気づき、その時の状況に合わせて適切な支援を提供することができる。(乳幼児健診で) 保健師とのやり取りで関心が薄い母もいたので、子供の発達状況や、表情などを見ていくだけでなく、保護者の心理面、子どもへの接し方、発言など細かく見てい

くことが重要。

3) 科学的に正しい知識を活用した専門的な関わり

専門職として科学的に正しい知識の伝達と根拠に基づく行動が必要であることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(HIV/性感染症検査では)ただ受診率を上げたいからという理由で動いているのではなく、本当の意味で住民の健康の保持・増進を図っていくような地域診断や統計などから見たアセスメントを行い、根拠のある行動が必要である。現在インターネットで情報が飛び交う中、(赤ちゃん訪問で)専門職から正しい知識を提供することは母にとってとても強みになる。

4) 長期的視野での対応力

短期的解決だけでなく長期的に考えた対応を行うことで地域看護活動を展開していることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で)地域の現状を客観的に把握し、今後予測される問題に対して住民にどのように働きかけを行っていくべきか、限られた人や予算の中でどのように地域を変えていくことができるか、長期的な対策を考える必要がある。(難病支援は)家族と本人の思いや不安を傾聴して、家族と本人の思いと今後を見据えながらすりあわせていく。

5) 健康課題への予防的アプローチ

現状だけでなく今後どのような問題が起こり得るのか予測しながら予防活動をしていくことを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で、)介入は住民のセルフケア能力を高め、健康増進な早期対処になるだけでなく、今後起こり得る新たな問題を防ぐ看護である。(赤ちゃん訪問で)実際に乳児が成長していく環境をみることで、今後どのような問題が起こり得るのかを予測することや、育児者を取り巻く環境についても知ることが出来る。

3. 個別課題から地域課題へ発展させた活動

このカテゴリーは、『地域組織・当事者グル

ープ活動を育成する継続的な関わり』『個人の健康課題から地域健康課題へと展開する活動』『個人、地域とつながり続けながら活動する』『地域や当事者同士で支え合えるネットワークづくり』『住民が地域の健康課題を認識するような働き掛け』の5サブカテゴリーから構成された。

1) 地域組織・当事者グループ活動を育成する継続的な関わり

対象者だけでなく地域住民と関わっている支援者を支えることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

地域のつながりを深めていくという点も大切にし、(様々な事業で)地域全体の健康維持のために住民が自発的に活動できるようアプローチしていくことも、今後を見据えた地域看護のあり方である。地域支援体制の推進・ゲートキーパーの育成など、対象を支える人を育成することにも強化していること。

2) 個人の健康課題から地域健康課題へと展開する活動

住民個々だけでなく、地域全体の健康問題を見出し、地域の健康づくりにつなげることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

個人を見ているだけでなく、個人を見ている中で地域全体の問題を見出し、そこから教育(健康教育)や事業に結びつけることが地域の健康につながるために大切である。ひとりで子育てをしないように地域を支えていくことが必要(赤ちゃん訪問)。

3) 個人、地域とつながり続けながら活動する

住民と継続的に関わりながら地域全体の健康問題へ取り組むことを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

患者と関係機関とのつながりが途切れないようにするためにも、ネットワークの一員として自分に何が出来るのか見極めながら継続的に支援していくことが大切。(健診・相談では)住民とつながりを途絶えさせないような継続看護が大切。

4) 地域や当事者同士で支え合えるネットワークづくり

住民同士が地域で助け合えるようなしかけをすることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業から) 住民同士を繋ぐことや、交流の場を提供し仲間づくりを促していくこと、情報共有の場を設けることなど周りの環境を整えることも重要な役割である。(母親学級で) 保健師は母親同士がただ情報交換出来るだけでなく、継続して良い関係を築いていけるように働きかけることが役割。

5) 住民が地域の健康課題を認識するような働き掛け

住民が地域の保健活動を理解するための働き掛けをすることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

効果的な一次予防を行っていくためには、市町村として行っている活動(市の一次予防事業)を市民に周知していくことが重要である。精神障害者への理解を住民に促していく必要がある(精神訪問事業)。

4. 専門的・組織横断的な連携及び協働

このカテゴリーは、『関係者・関係機関と協働しながら地域を支える』『日々の個別支援から最適な資源への橋渡し』『多職種・他機関間の調整』の3サブカテゴリーから構成された。

1) 関係者・関係機関と協働しながら地域を支える

地域の特性を踏まえて関係職や関係機関と連携しながら地域活動を展開していることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

地域の保健師だからこそ知っている地域の特性を生かして、(母親学級で) 助産師や保育士など他職種と連携をとり、その専門を生かした事業内容にしていくことが住民に寄り添った事業になる。(受理会議で) 多職種間でカンファレンスなどを行うことで、各機関が得られている情報を共有することができ、その情報を統合させていくことで新たな疑問・問題・解決策を抽出していくことができる。

2) 日々の個別支援から最適な資源への橋渡し

個別の支援活動を他職種・他機関と連携しながら、対象者が効果的に資源を利用できるような架け橋をすることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で) 他の職種や施設、機関と連携・調整を取りながら、その人が本当に必要としている支援は何であるかをアセスメントし、資源を効果的に活用できるサポートを行うパイプ役として市町村や管轄地域で活躍している。(母子保健事業で) 発達支援教室のような会の存在を情報提供することは、育児支援で保健師が行う重要な役割である。

3) 多職種・他機関間の調整

様々な職種や機関が効果的に連携・協働できるように調整をすることを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

(様々な事業で) 保健師は専門職をまとめる司令塔のような存在であり、資源(事業や関係機関)を調整できることが強みである。(4歳児健診で) 保健師の役割としては、問診などといった指導的な関わりも重要であると考えたが、その健診を行うに当たっての医師、歯科衛生士といった専門職との連携、異常が疑われた際の継続的なフォローアップ機能との調整などの仲介的な役割が多い。

5. 地域特性に応じたPDCAサイクルの展開

このカテゴリーは、『地域課題の抽出から計画・実施・評価プロセスの責任を担う』『地域特性に応じた保健活動の展開』『費用対効果と公平さを考慮した事業の実施計画』の3カテゴリーから構成された。

1) 地域課題の抽出から計画・実施・評価プロセスの責任を担う

地域の課題を見つけ出しその課題解決のための事業計画から実施展開することを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

地域看護では積極的に地域の実態やニーズを知り、それらを(介護)事業の計画に生かすこ

とで、より地域住民に効果のある支援ができる。看護活動における計画・実施・評価の一連のプロセスを展開し、支援していくことも保健師には重要なことである（母子保健）。

2) 地域特性に応じた保健活動の展開

地域の特性を把握し住民を主役とした生活環境づくりも含めた地域支援を学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

（様々な事業で）地域の特性を把握し、住民にとって生活しやすい環境づくりを含めた事業を計画し、実践していく。その地域の特徴にあった健康教育の内容・方法を工夫する必要。

3) 費用対効果と公平さを考慮した事業の実施計画

地域の保健行政策として公的財源を基に効果を踏まえた事業計画実施を行うことを学生たちは地域看護の特性として捉えていた。代表的な記載を以下に示す。

事業の企画と運営において保健師は費用対効果を重視することが地域看護の特性。管轄内の市町が公平なサービスを受けられるようにしていくのが保健所の役割。

Ⅶ. 考察

地域看護学実習の目的は、「保健医療福祉活動の実際を理解するとともに、地域住民のあらゆる健康課題に対応する地域看護の機能および方法・技術を学ぶ」ことである。保健師の固有の活動は、「保健師教育の課題と方向性明確化のための調査」の報告書¹³⁾において「保健師は現在の社会現象が産み出す健康問題を予測して予防的に対処すること、組織を理解すると共に、データに基づいた根拠をもって組織全体を支援すること、理論に基づいた支援ができる能力が求められている」と述べている。

地域看護における保健師の独自性を確認し、保健師の支援方法・技術を学ぶ機会を通して、地域看護の特性に対する学生の学びを分析し、地域看護学教育の課題を考察する。

1. 個別性を基盤とし、地域の特性を踏まえて日常生活の場を配慮したケア

地域看護は地域で生活している一人ひとりの健康の改善・向上に視点がおかれるとともに、地域全住民の健康を目的にしている。したがって地域看護活動は、その人の日常生活の場、その人の住む地域を配慮しなければならない。

保健師が『住民の声を受け止め共感する生活支援者』であり、『生活者が身近で相談できる相手』という存在であることを捉えていたことは、乳幼児健診、特定保健指導、家庭訪問などの実際の場面で学生が住民と直接接する体験を通じ地域に密着した活動が地域看護の特性であることに気づくことが出来たためであると考えられる。地域の全住民への活動へ展開するためには住民への啓蒙や協力を求めることが必要になる。住民と協働するために『地域保健活動に不可欠な住民との信頼関係づくり』が基盤にあること、そのうえで、事業の中で『生活ニーズに寄り添ったバックアップ』のために、『地域看護を展開するための幅広いアセスメント』を実施し、『健康意識や行動変容へとつながる働きかけ』『住民が主役となって地域の課題に取り組める支え役』を実践していくことが[生活の場での住民との協働]になることと学生は気づくことが出来ていた。小松崎らは、体験による学びとして、学生が対象者の生活の場に出向き、保健師の専門的な援助技術を見て聞いて得る学びだけではなく、住民と直接出会い「住民から学ぶ」ことが影響していると、保健所・市町村実習における体験の意義を述べている¹⁴⁾。この特性の捉えは、学生がさまざまな保健事業参加において、その場での住民と保健師とのかかわりを通して、保健師活動のコアとして学んだものとする。

2. 総合的かつ継続的に疾病予防や健康の保持・増進・回復を重視したケア

保健師活動の実務においては、個人とその家族の保健問題の改善とともに、そのような問題が発生しないよう未然に防ぐような働きかけも行う。

保健師が母子保健事業の展開において、『乳

幼児および保護者の健康課題や保育力へのアプローチ』を『科学的に正しい知識を活用した専門的関わり』により実施していることを学生は地域看護の特性と捉えることが出来ていた。保健師の対応は顕在化している問題に対応しているだけでなく、常に『潜在的ニーズを引き出し対象者が認識できる関わり』をしており、[潜在的な健康課題を予見した関与]が重要であることに気づくことが出来ていた。保健師教育で強化すべき学習内容に「保健師は現在の社会現象が産み出す健康問題を予測して予防的に対処すること」を挙げられていること¹⁵⁾からも健康課題をもつ個人やその家族だけでなく、これから同じような課題をもつかもしれない人々に対しても働きかけていくことの重要性を学んだものとする。

一方、武藤らは「家族間の育児・介護能力を維持・促進する援助」に関しては、学生だけでは学びにくく、現地保健師による教育的な働きかけが影響を与えることも述べている¹⁶⁾。学生は、保健事業の目的が『健康課題への予防的アプローチ』にあり、保健師には『長期的視野での対応力』という能力が求められていることを捉えていたが、この能力は、現場での体験が、実際に目にするだけでなく、自らが経験することにより意味付けができ、学びとして広がる。その能力を培うような学修支援方法を検討していくことは重要であるとする。

3. 個人や家族と地域との関連を認識した活動展開

地域看護は、地域を構成する1つの単位である個人とその家族の健康保持のために活動を展開する。それは人的・物的にも家族自身のもつ資源を利用しながら個人や家族のヘルスニーズを満たし、個人・家族の健康な生活を維持するように導く。そして、これらの活動を通して地域全体の健康水準を高めていく。

学生が体験した健康教育や健診・相談事業、一次予防事業から『個人の健康課題から地域健康課題へと展開する活動』であることを捉えることが出来ていた。また、地域のグループ支援活動への参加を通じて保健師が『地域組織・当

事者グループ活動を育成する継続的な関わり』を実施し、『地域や当事者同士で支え合えるネットワークづくり』を目指していることへの気づきや、『個人、地域とつながり続けながら活動する』役割があること、一次予防事業や家庭訪問事業などから『住民が地域の健康課題を認識するような働きかけ』を行うことが『個別課題から地域課題へと発展』させた活動になると学生は捉えることが出来ていた。北山は、行政組織に所属して行う看護の特質として、「住民誰もが地域で生活し続けられる基盤づくり」をあげ、人々がいきいき暮らせる地域づくりを目指し、住民の主体的な問題解決への支援であることを述べている¹⁷⁾。学生が捉えた地域看護の特性は保健事業を通じた総合的な学びとして記載されており、保健師が、地域住民の健康や生活を守る存在であり、地域住民とともに、あるいは住民を支える役割を担っていることを地域看護の特性として学んだものとする。

4. 関係組織・機関と協力・連携して行うケア

昨今の社会的な要請として対象や地域の状況によって、地域保健医療活動は関係組織や機関との協働によって、組織的、計画的に実践されるダイナミックの活動である。

保健師は『日々の個別支援から最適な資源への橋渡し』を行い、社会資源をつなぐ役割をとり『関係者・関係機関と協働しながら地域を支える』ように保健事業を展開していることに学生は気づくことが出来ていた。また、複合的な健康課題に対してはヘルスケアチームのなかで『多職種・他機関間の調整』という要の役割を保健師がとっていることを地域看護の特性と捉えていた。野原らは、学生の実習経験と自己評価から地域看護学実習の展開方法を検討するなかで、保健師が保健部門だけではなく他部署でも活躍していることを知り連携の必要性の学びが深まったことをあげ、実際の体験が学びにつながりやすいことを述べている¹⁸⁾。学生は限られた実習期間の中で保健師の活躍する様々な現場での学びを通じて「専門的・組織横断的な連携及び協働」の実際を地域看護の特性と捉えることが出来ていた。

保健師の保健活動をより多角的に捉えることができるためには保健師のもつ情報を関係職種に提供する場面への参加や様々な職種の連携や協働で行われている保健事業に、より多く体験させる必要があると考える。

5. 地域生活を基盤にして展開する継続的、包括的な看護活動

地域看護は地域で生活している人々を対象に、生活のなかの健康問題に対して総合的にかつ継続的に働きかける。そのため個人を通じて地域全体へ一貫した計画のもとに継続的、包括的な看護を行う。

保健師が『地域特性に応じた保健活動の展開』を実施しながら、『地域課題の抽出から計画・実施・評価プロセスの責任を担う』役割にあることを学生は捉えることが出来ており、その保健活動は『費用対効果と公平さを考慮した事業の実実施計画』が基盤にあることも捉えていた。藤丸らは、実習目標と学びの到達度の検討を行い、「地域特性・健康課題」については、実際の事業を通してさまざまな視点から捉えることができるが、「地域看護活動の展開」については、事業の説明が中心となるため、実際に体験する事業と結び付けることが難しく、学生自身の理解が漠然としていたと述べている¹⁹⁾。A大学の学生も保健活動の実習内容を1つ1つの事業と関連付け、計画・実施・評価に結びつける視点で理解することが出来たかは記載には見当たらなかったことから、理解を促進する学習としてカンファレンスの充実を図るなど、実習プログラムの検討をする必要がある。

保健師は地域の特性を踏まえた活動の具体的な目標を立て、そして目標達成のための計画を立てて、それを遂行・評価する「地域特性に応じたPDCAサイクルの展開」の重要性に学生は気づくことができていた。しかしながら、地域看護活動を進める過程を実際体験することは難しく、実習中の保健師とのかかわりだけから学ぶことには課題がある。そのため地域看護実習の効果を高めるために、事前学習からつなげて考える導きをすることや、実習後のカンファレンス等で深めることなど、実習方法を検討す

る必要がある。

学生は、地域看護の特性について、保健師が「生活の場での住民との協働」や「専門的・組織横断的な連携及び協働」の実践をとおして「潜在的な健康課題を予見した関与」をしていることや、保健活動が「個別課題から地域課題へと発展」であり、「地域特性に応じたPDCAサイクルの展開」を中心とした活動であると捉えていた。

研究の限界として、今回は、学生の最終レポート分析により、学生が学んだ地域看護の特性の捉えを明らかにしたが、学生が記述した範囲であり、それが地域看護の特性として十分に表現できているものではない。今後は、レポートや日々の記録などのみではなく、カンファレンスや面接等での学生の語りなどからも把握し、学生が何からどのように学んだのかを明らかにする必要がある。

また、学生が実体験した保健事業からの学びが反映していることから、経験したことの意味付けができ、学びとして深まるような学修支援方法の検討が必要である。

VIII. 結語

地域看護学実習における保健所・市町村実習後において、学生がとらえた地域看護の特性を明らかにすることを目的に、学生の最終レポートを分析した。分析の結果、「生活の場での住民との協働」「潜在的な健康課題を予見した関与」「個別課題から地域課題へと発展」「専門的・組織横断的な連携及び協働」「地域特性に応じたPDCAサイクルの展開」の5つのカテゴリーが抽出された。

学生は、地域看護の特性について、保健師が「生活の場での住民との協働」や「専門的・組織横断的な連携及び協働」の実践をとおして「潜在的な健康課題を予見した関与」をしていることや、保健活動が「個別課題から地域課題へと発展」であり、「地域特性に応じたPDCAサイクルの展開」を中心とした活動であると捉えていた。今後は、レポートのみではなく、カンファレンスや面接等での学生の語りなどから、学生

が何からどのように学んだのかを明らかにする必要がある。また、学生が実体験した保健事業からの学びが反映していることから、経験したことの意味付けができ、学びとして深まるような学修支援方法の検討が必要である。

引用文献

- 1) 全国保健師教育機関協議会：平成 20 年度保健師教育の課題と方向性の明確化のための調査報告書（第 2 版），1-67，2009.
- 2) 福本恵：保健師教育の変遷と今日的課題，京都府立医科大学雑誌，117 (12)，947-955，2008.
- 3) 麻原きよみ：平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業）総括研究報告書，保健師基礎教育における技術項目と卒業時の到達目標に関する研究，2008.
- 4) 大橋裕子，白石知子，他：地域看護学実習において学生がとらえた保健師の活動と役割，生命健康科学研究所紀要，18，44-48，2011.
- 5) 前掲書 4)
- 6) 古田加代子，佐久間清美，他：地域看護学実習における家庭訪問からの学び，愛知県立看護大学紀要，13，33-40，2007.
- 7) 久井志保，二重佐和子：地域看護学実習における学生の学びと課題—保健師のベストプラクティスとの比較から—，兵庫大学論集，16，161-167，2011.
- 8) 魚里明子，森田智子，他：統合カリキュラムにおける地域看護学実習の学習成果と課題，関西看護医療大学紀要，3 (1)，18-28，2011.
- 9) 吉岡幸子，野尻由香，他：地域看護学実習Ⅱにおける実習経験内容と今後の課題，帝京医療技術学部看護学科紀要，3，85-99，2013.
- 10) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会（第一次報告），厚生労働省，2010.
- 11) 田中美延里，奥田美恵，他：捉えにくい保健師の専門性に着目した実習生の学習過程，四国公衆衛生学会雑誌，57 (1)，85-92，2012.
- 12) 全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会：保健師教育におけるミニマム・リクワイメンツ全国保健師教育機関協議会版—保健師教育の質保証と評価に向けて— 2014，全国保健師教育機関協議会，1-134，2014.
- 13) 前掲書 1)
- 14) 小松崎愛美，工藤恵子，他：体験による学生の学び—保健所・市町村実習の学びから—，武蔵野大学看護学部紀要，4，49-61，2010.
- 15) 前掲書 1)
- 16) 武藤紀子，浦奈穂美，他：家庭訪問実習における地域看護教育方法の検討，千葉大学看護学部紀要，24，63-72，2002.
- 17) 北山三津子：行政組織に所属して行う看護の特質，最新公衆衛生看護学総論第 2 版，日本看護協会出版会，168-170，2015.
- 18) 野原真理，若林千鶴子，他：地域看護学実習の展開方法の検討—学生の実習経験と自己評価からの分析—，医療保健学研究，4，27-39，2013.
- 19) 藤丸知子，岩永洋子，他：地域看護学実習における学生の学びの到達度の検討，Journal of Nagasaki Society Nursing，7 (1)，27-34，2011.